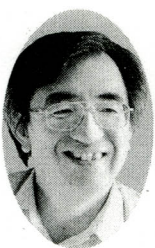


時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所教授

はしかが流行っている。予防接種をしなかった世代の若者たちの間での流行が主であるらしい。ワクチンも、抗体検出用の検査キットも不足しているようで、流行の拡大を懸念する声も多い。患者が出たことで全学を休講にした大学もある。

しかし考えてみれば変な話だ。私の世代(五十年代前半)の人たちには、はしかは誰もがかかる病気だった。兄弟の誰かが学校でもらってきて未就学の弟、妹に感染するケースも多かった。成人に達するまで、はしかにかからずにすむ人は、ごく一握りの存在だった。今回の流

はしか流行の教訓

行から、私たちは何を学ぶべきだろうか。

予防接種が広まると患者数は減る。兄弟も少なく、感染の機会さらには減った。しかし皮肉にもこのことが話をややこしくしている。せっかく予防接種を受けても、その後ウィルスにさらされることもないので発病の

感染症と共存の道探ろう

染症への無知が広まり、社会は無防備となり、一度流行が起きると不安感をかきたたれる。必要以上の、やみくもなる消毒や予防接種が行われるが、これが無菌化をいっそう加速させる。いくつかの感染症については、医者すらその症状を知らない。

はしかは生体から何らかかれば、人間は生態系から何らかの反作用を受ける恐れがある。彼らを撲滅しようなどと思わないほうがよい。彼らとは共存、ないしは折り合いの道を探るべきなのだ。

むしろ感染症はどんなものでもあなどるべきではない。それに誰も病気にはかかたくはない。しかし人類は、その誕生以来、個人のレベルでは病気にかなりながら成長につれて免疫を獲得し、また社会としては彼らと折り合いをつけながらやってきた。

恐れがある。同じようなことが、たぶんほかの多くの感染症にもあてはまる。社会全体が無菌化し、抵抗力を失う。抵抗力は個人レベルでの抵抗力のほかに、社会としての抵抗力がある

と私は思う。

こうなると、途上国で発病したら助かるものが日本での発病は死を意味するという、奇妙なことが起こるようになる。私たちが、人類が医学の発達で感染症を克服したかのように思いがちだが、それはとんでもない思い違いである。

はしかの流行には、上述のように、兄弟間での感染が関係している。少子化は、こんなところにも影響を及ぼしているの

力が最低のレベルにある。感

も、また、生態系を構成する一

だ。

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。